

平成30年度 日本大学文理学部個人研究費 研究実績報告書

所属・資格 社会学科・助手

申請者氏名 後藤 美緒

研究課題		〈上方〉放送文化に関する歴史社会学的研究(2) ：占領期の在阪メディアの展開と知識人の参与に着目して
報告の概要	研究目的 および 研究概要	本研究の目的は、これまで申請者が収集してきたラジオ・テレビの放送台本・脚本を資料に、〈上方〉放送文化の表象が現れるプロセスを製作レベル/台本・脚本における内容レベル/受容層である視聴者の経験といった三つのレベルから明らかにすることである。作業を通じて、戦後日本における、演芸や放送を通じた大衆と知識人の関係を考察する。 研究の具体的な内容は、史資料の収集と放送・演芸関係者などへのインタビュー、現地でのフィールドワークである。 研究を通じて得られた成果は学会や研究会などを通じて公開に努める。また、情報収集やネットワーク形成のために学会や研究会にも積極的に参加する。
	研究の結果	本年度も着任以来つづけている各種資料（放送台本番組確定表、回想録等）の収集を、放送博物館や上方演芸資料館、関西大学でおこなった。そのうえで、とくに本年度は占領期に着目し、製作の現場においていかなる葛藤と調整が行われたのかを収集した資料を複合的に用いて検討した。分析の結果、製作者たちは、GHQの民主化政策、東京放送局、そして聴衆という三つのレベルで対応したこと、聴衆の要望に応えることで東京放送局の意見を退けると戦略を取っていたことを明らかにした。 研究の成果は様々な形で発表した。三者との葛藤のなかで番組制作ができあがる過程を学会報告（研究発表①）、ギャラリートーク（研究発表②、2019年3月17日予定）にて発表した。また、近代日本において、経済階層ではなく文化階層で分断されてきた大衆と知識人が出会う場の創出として漫才の製作があったことを、依頼原稿（研究成果物①）にて明らかにした。
	研究の考察・反省	本年度は、放送文化基金（代表：法政大学兼任講師丸山友美）やトヨタ財団（代表：筑波大学研究員木村豊）からの研究助成プロジェクトと関連付けながら、その成果を学会報告、一般誌への招待原稿執筆、ワークショップといった様々な形でおこなうことができた。プロジェクトにかかわることで新たな手法や発想を得られ、研究が深まったことは大きな進展である。成果については、今後も論文、学会報告などで発表していく。 また、成果の社会還元に関する具体的な手法を身につけられたことも大きな成果である。とくに、現在進行中のワークショップでは多様なアクターに配慮することが求められることを実感した。成果の報告に関しては、具体的に実践すること、その方法を精緻化すること、そして論文としてまとめることが今後の課題である。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所 研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>【研究発表】 ①後藤美緒、「大衆とつくるラジオ番組——占領期における演芸番組「上方演芸会」を事例に」第69回関西社会学会、於松山大学、2018年6月2日。 ②（ギャラリートーク担当）後藤美緒、「放送作家・長沖一が見た戦争と戦後大阪」写真・映像展示『日常へのまなざし——昭和20年代、進駐軍が見た日本の街角』2019年3月17日（日）、於スペース AOM.（予定）</p> <p>【研究成果物】 ① 後藤美緒、「秋田實の『無邪気な笑い』」『三和新聞』9月号、676号、4面。2018年9月（依頼原稿）</p>	